

「私はこう聞こえます」の実現に向けて

Toward the realization of “I sound like this.”

吉田 彩, 長嶋 洋一

Saya Yoshida & Yoichi Nagashima

静岡文化芸術大学デザイン学部

Shizuoka University of Art and Culture

g2024118@suac.ac.jp, nagasm@suac.ac.jp

内容梗概: 本研究は、聞き慣れた曲が突然別のメロディーに聞こえた筆者の事例をもとに、周囲の人にも同様に拍のずれた別のメロディーを体感してもらうことを目標としたものである。ドラムのビートのアクセント・ベースの伴奏・演奏方法・日本語のモーラを利用した歌詞等のアレンジと、被験者との試聴を繰り返して実験を進めてきた。その結果、元のメロディーとは別のメロディーに聞こえる被験者が数名現れてきた。本研究は途上段階にあり、拍ずれによって自分が認知しているメロディーとは異なるメロディーが聞こえる錯聴の興味深さ・新たな可能性を提示する。

Keywords: メロディー, 錯聴, 拍ずれ, ビート, アレンジ

1 はじめに

筆者は、日本のスーパーマーケットでよく耳にする「呼び込み君のBGM」が、いつもとは違う別のメロディーに聞こえるという体験をした。そこでさらに調べてみると、そのときに聞こえた別のメロディーというのは、原曲の楽譜的には本来聞こえるはず

であるメロディーであったのだ。筆者がいつも聞こえていたメロディー（以後「さや版」とする）と、本来聞こえるはずのメロディー（以後「オリジナル」とする）を長嶋が耳コピした楽譜 [1] を元に採譜した (Fig. 1)。この2つを比較すると、さや版は8分音符分だけ前に押し出す形でずれてメロディーを認知しているということがわかった。



Fig.1 上→オリジナル、下→さや版

ドラムのビートのアクセント、ベースの伴奏、演奏方法、日本語のモーラを利用した歌詞等をアレンジするといった試行錯誤を繰り返し、オリジナルのメロディーをさや版のメロディーに聞こえるように誘導することが本研究の目標である。また、実験で用いるオリジナルとさや版の2種類のメロディーは、拍ずれこそしているが、メロディーそのもののリズムや音量のアクセントは全く同じものであることを前提にしている。

2 実験方法

2.1 第1段階：8ビート・ロック化

実験を進めるにあたって、はじめに Max8 でオリジナルのメロディーを耳コピーして打ち込んだ。そこから第1段階として、オリジナルに合うようにロック調の8ビートのドラムとベースの伴奏を重ねた。この8ビートは、のちにさや版との聞き比べをするために作成した。次の段階からいよいよさや版認知のための実験を始めることとなった。

2.2 第2段階：8分音符だけオリジナルのメロディーを前倒しする

第1段階で作成したドラムとベースを、8分音符だけ前倒しさせたオリジナルのメロディーと同時に鳴らしたものが第2段階である。すなわち第2段階とはさや版を認知させるための音源である。この段階に進んだ当初は、一緒に実験を進めた長嶋も未だオリジナルが聞こえており、何度か試聴を重ねてさや版の聞こえ方を意識することで、段々とさや版のメロディーを認知することができたのである。また、筆者のゼミの仲間や同じ授業を受講している学生、教授の数名を被験者とし試聴してもらって取った簡単なアンケートによると、第2段階ではさや版に聞こえる人は少なかった。

2.3 第3段階：Anticipation化

第2段階のアレンジからさらに長嶋が提案した実験が「Anticipation化」である。Anticipationとは一般的に「期待」「予想」「先見」といった意味を持っているが、音楽的な意味でいうリズム的な Anticipation は、前ノリのリズムのドライブ感を作るためのシンクレーションによるメロディーの変形のことである。例として、日本の歌手・郷ひろみの「二億四千万の瞳」[2]のサビでは「おくせんまん」というワードを「おっくせんまん」と前に突っ込む形で歌われている。しかし、この実験の前提にも述べたように、今回の実験ではメロディーの音量のアクセントとリズ

ムは変えないことを条件にしているので、Anticipation化するのはさや版に誘導するためにアレンジしているビートや伴奏のみとしている。

第3段階の成果は、さや版を認知させるための強い前ノリを生み出したことで大きく前進した。しかし、相変わらずオリジナルが聞こえる学生もおり、第2段階よりさや版に聞こえるような気がする、という人が少し増えたという微々たる結果にもなった。思うようにさや版に誘導しきれなかったのは、長嶋の文献[3]にもあるように、ビート感は Anticipation であるとしても肝心のメロディーはそれほど前ノリしてくれないという大きな問題点も同時に見つかったのである。

2.4 第4段階：ボカロで歌詞を歌わせる

ここまでのビートや伴奏のアレンジに加え、新たに筆者が勝手に付けた日本語の音感を利用した歌詞で錯聴をさせようと試みたのが、第4段階である。文献[4-7]を参考にし、多くの人が聞き慣れているオリジナルのメロディーを歌おうとするにはなんとも歌いづらいと感じさせると同時に、さや版を認知している状態であれば歌いやすいという歌詞を付けることに奮闘した。そのやり方は、オリジナルメロディーの重要である表拍の音にあえて「弱化モーラ」となる「撥音・促音・長音・二重母音」をあてはめるという方法である。(Fig.2) また、さや版は元々オリジナルのメロディーが8分音符だけ前にずれて認知したものであるため、必然的に、オリジナルの重要な表拍に設置した弱化モーラは、さや版の強調したくない裏拍の部分にあたる。これはとても好都合であった。

これに加え、Anticipation化した第3段階のビートと伴奏に合うよう特化した歌詞も作成した。(Fig.3) 第3段階の最後にあがったメロディーだけは前ノリしてくれないという問題を解消すべく、オリジナルの冒頭の「8分音符+4分音符+8分音符」という根強いシンクレーションの4分音符の部分に弱化モーラを設置することで、オリジナルメロディーの認知をうまく薄めてくれるのだ。重要である表拍に弱化モーラを設置する行為とは異なるものであるが、被験者からは「より自然に Anticipation化を感じるができる」とのコメントもあがった。

実際に被験者に試聴してもらうときは、歌詞を視覚的にも認知しやすいように画面に字幕のように文字を表示していたのだが、全くの初見であるその歌詞や弱化モーラを優先したことによる歌詞そのもの

の意味はつながりがなかったことへのシュールさ
逆に意識がいてしまうというコメントも若干あ
った。

2.5 考察

ここまでの4段階をふまえて、実験を始める前
ではオリジナルそのものを聞いていてもさや版で
認知してしまう筆者に賛同する人は誰もいな
かったところから、数人はさや版を認知する
ことができるころまでは検討が進んだ。被験
者の中には、「普段聞かえていたメロディーと
全然違う裏のメロディー（さや版）が聞こ
えてきてとても驚いた」という声をあげた
人もいた。(Table 1)

Table 1 さや版を認知したかのアンケートの結果

	さや版を認知した人 (15人中)
第2段階	5人
第3段階	7人
第4段階	8人

Figure 2 shows a musical score in G major (one sharp) and 4/4 time, with a tempo of 130. The lyrics are: かんぱい カクテル けっこん ボサノバ しかったら と も だち またあおう バカンスで すいかのかじゅう は ひゃく ばー せん と. The score uses weak moras (indicated by 'y' under notes) to create a specific rhythmic pattern.

Fig. 2 弱化モーラを利用した歌詞の1例

Figure 3 shows a musical score in G major (one sharp) and 4/4 time, with a tempo of 130. The lyrics are: こう さてんで かい てんずし しんせきと た べ たい もういちど どうしても かいさいし て ほ しい の. The score uses weak moras (indicated by 'y' under notes) and includes an anticipation mark (a note before the bar line) to create a specific rhythmic pattern.

Fig. 3 Anticipation に特化した弱化モーラを利用した歌詞の1例

3 おわりに

本研究ではたまたま日本のスーパーマーケットでよく聞く「呼び込み君のBGM」を対象にして進めたが、あまりにも「オリジナル」のメロディーの印象が強く、未知なる探求に苦戦することとなった。筆者はこの曲以外にも自身の好きな JPOP の曲の間奏部分で拍ずれの認知を起こしたことが 1 度だけあったが、やはり既に熟知していたメロディーの認知をずらすことは難しいと再認識すると同時に、拍ずれを起こしたときの衝撃はとても大きなものであり、本文中にも述べたとおりその衝撃を 1 人でも多くの被験者に体感してもらうことができたことはこの実験を進めた上での功績でもあった。発展途上である本研究と 4 段階の実験を専門家・音楽家の方々に直に聞いていただくことでまた新たな音楽のメロディー認知の可能性や問題点も明らかになると予想される。

謝辞

アンケートや実験の検討にご協力いただいた多くの方々に、厚く感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

参考文献

1. https://nagasm.org/1106/news6/docs/Yobikomi_kun.jpg
2. 2 億 4 千万の瞳. <https://youtu.be/f8XUgBMSDWo>
3. 長嶋洋一. あちら側の聞こえ方をいかにしてこちら側に呼び込むかという無謀な挑戦について. 情報処理学会研究報告音楽情報科学 (2022-MUS-134) , 情報処理学会, 2022
4. 村尾忠廣, 疇地希美. 90 年代おじさんの歌えない若者の歌～その 2 ー弱化モーラによる配字シンコペーションとおじさんの音楽情報処理. 情報処理学会研究報告音楽情報科学 (1998-MUS-026) , 情報処理学会, 1998.
5. 青野裕司, 岡野真一, 片寄晴弘. 90 年代おじさん予備軍の歌えない若者の歌. 情報処理学会研究報告音楽情報科学 (1998-MUS-026) , 情報処理学会, 1998.
6. 村尾忠廣, 夏目佳子. 子どもの歌における撥音「ん」のモーラ処理: 「ん」の配置、シラブル化の様相をめぐって. 帝塚山大学現代生活学部紀要 第 8 号, 2012.
7. 岩橋亮人, 橋田光代, 片寄晴弘. ポピュラー音楽の頂点音における母音の出現頻度に関する分析. 情報処理学会研究報告音楽情報科学 (2016-MUS-